

社会的一体感の尺度作成

西 田 保*

人間の動機づけは、周りにいる重要な他者に対する主観的な感覚（信頼され、理解され、受容されているという感覚）と関連している。このような感覚（社会的一体感）は、学校、家庭、職場、スポーツなどの様々な場面において、人間の動機づけにポジティブな影響を与え、良好な精神的健康の維持にも役立っていると考えられる。そこで、本研究では、この種の研究をさらに推進させるために社会的一体感を測定する尺度を作成し、その尺度の信頼性および妥当性を検討することを目的とした。

対象者は、5つの学校の高校生912名（男子502名、女子410名）であり、年齢の範囲は15歳から18歳（平均：16.3歳）であった。運動部所属者は486名、無所属者は415名であった。対象者は、予備調査を経て選定された信頼、理解、受容からなる社会的一体感尺度の各項目に対してリッカート法の5段階で回答した。

因子分析（主因子法、プロマックス回転）の結果、社会的一体感尺度は1因子の9項目で構成されることが明らかとなった。この尺度の α 係数は.93、再検査法（4週間間隔）による相関係数は.75であり、いずれも高い信頼性が認められた。社会的一体感の平均値は、女子の方が男子よりも高く、運動部所属者の方が無所属者よりも高い値であり、この尺度の弁別力が示された。また、社会的一体感、楽しさ、満足感、被受容感、動機づけ（勉強、スポーツ）との間に正の相関関係を、被拒絶感、抑うつ、対人的疎外感との間には負の相関関係を示し、この尺度の併存的妥当性が確認された。

以上の結果から、本研究で作成された社会的一体感尺度は、信頼性および妥当性ともに高いことが明らかとなり、今後の研究において適用可能であることが示された。

キーワード：対人関係の認知、社会的一体感、尺度作成、信頼性、妥当性

緒 言

心理学における動機づけ研究は、動因理論 (Hull, 1952)、動機論 (Murray, 1938)、認知論 (Deci, 1975)、感情論 (Weiner, 1972) などの立場において、それぞれの理論や考え方に依拠して行われてきた。例えば、これらの歴史の中で、達成動機 (McClelland et al., 1953)、期待価値理論 (Atkinson and Feather, 1966)、自己効力感 (Bandura, 1977)、原因帰属理論 (Weiner, 1972)、自己決定理論 (Deci and Ryan, 1985)、達成目標理論 (Dweck, 1986; Nicholls, 1984) などに関しては、測定尺度の開発や理論的モデルの検討からそれらの実践的応用に至るまで多くの研究が蓄積されてきた。

これらの動機づけ研究においては、個人的な要因(動

機、期待、有能感、自己決定、達成目標など)を中心とした理論構築やそれに依拠した研究が主流であったと考えられる。しかしながら、最近では、個人を取り巻く学習環境(動機づけ雰囲気、環境の認知など)や人間関係(友人関係、指導者との関係など)などといった環境要因の重要性が指摘される。個人の動機や有能感が充足される課題が提供されたり、自律的な目標が設定されたとしても、それらを周りの人とのどのような関わりの中で遂行するのかによって動機づけは影響されるということである。特に周りにいる重要な他者からどのように評価されていると感じているのかは、その後の動機づけに強く影響するであろう。

このような他者との関わりと関連する概念として、Ryan and Deci (2000) が自己決定理論の中で取りあげ

* 愛知学院大学心身科学部健康科学科
(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: tamotsu@dpc.agu.ac.jp

た関係性の欲求 (need for relatedness) があげられる。彼らは、人間には元来、自律性 (autonomy) の欲求、有能性 (competence) の欲求、関係性の欲求という3つの基本的な心理的欲求があり、これらがすべて満たされたときに、人は内発的に動機づけられ、特定の行動へ向かうと主張する。この中で自律性の欲求とは、自分の行動が自己決定的であり責任感を持ちたいという欲求であり、有能性の欲求とは、やればできるという自信や自分の能力を示したいという欲求のことである。そして関係性の欲求とは、他者との良好な関係や結びつきを感じたいという欲求のことであるとされているが、彼らの定義を読む限り、抽象的な表現であり具体的な内容にまで言及されていないようである。

そこで、本研究では、動機づけの環境要因 (対人関係の認知) として、Ryan and Deci (2000) の関係性の欲求の考え方をさらに発展させた取り組みを行うこととする。そして、動機づけと対人関係の認知に関するこれまでの研究 (中谷, 2007; 岡田, 2013 など) から、「周りの重要な人からの信頼、理解、受容は、人間の行動や動機づけの基礎である」という仮説を設定する。その根拠として、例えば、伊藤 (2007) は、自分にとって重要な他者と親密で安心できる関係を築くことによって、それを支えとしながら積極的に行動することができることと述べていることがあげられる。また、内発的に動機づけられるためには運動有能感が重要であると主張する岡沢他 (1996) は、運動有能感尺度を作成する過程において、個人的な要因である「身体的な有能さ」や「統制感」と同様に、対人関係の認知要因である「受容感 (教師や仲間から受け入れられているという自信)」の重要性を指摘している。また、著者が実施した中学生から大学生までを対象とした予備調査において、自分の周りにいる重要な人から、信頼され、理解され、暖かく受け入れられているといった感覚が、調査対象者の学業場面および運動やスポーツ場面での動機づけと正の関係にあったことが明らかであった。

このように、自分を信頼し理解してくれる他者の存在を感じ、自分は認められている、受け入れられていると感じるときに、人間は強く動機づけられると考えられる。すなわち、重要な他者からの信頼と理解を持って、自分は暖かく受け入れられているという感覚が高ければ、様々な場面 (学校、家庭、職場、スポーツ活動など) において積極的に努力することができるかと予想される。また、被受容感の低さが抑うつ傾向者の特徴と関連しているとする杉山・坂本 (2006) の研究からすると、このような感覚は、抑うつ、不安、非

行といったネガティブな側面にも好ましい影響を与え、メンタルヘルスの改善にも役立つことが期待されるであろう。社会的一体感の影響は、図1に示す通りである。

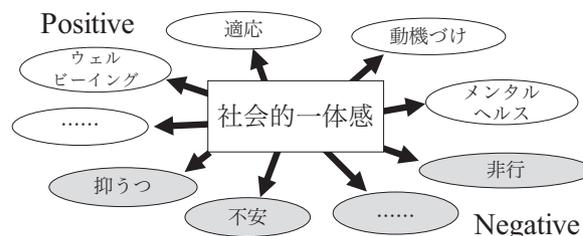


図1 社会的一体感が及ぼす影響

以上のことを踏まえて、本研究では、動機づけの環境要因として人間関係 (対人関係の認知) に焦点を当て、自分の周りにいる重要な他者から、「信頼され」「理解され」「暖かく受け入れられている」という感覚のことを「社会的一体感 (Sense of Social Togetherness)」と命名し、これを測定する尺度を開発し、その尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とした。社会的一体感とは、被受容感とかなり近い概念であるが、受容される前提として、両者間に信頼関係が築かれ相互に理解されている点が加味されており、単に受け入れられているだけではなく両者に一体感があるという意味合いが含まれている。この尺度の開発により、動機づけを高める対人関係のあり方など、今後の研究推進が大いに期待されるであろう。

方法

調査対象者

3県下の5つの学校に在籍する高校生を対象者とし、データの欠損値がなかった912名を分析の対象とした。それらの学年および男女の内訳は、表1に示されている。年齢の範囲は15歳から18歳、平均値は16.3歳であった。現在運動部に所属している者 (所属者) は486名、所属していない者 (無所属者) は415名であった。

表1 対象者数

	1年	2年	3年	計
男	288	129	85	502
女	216	108	86	410
計	504	237	171	912

調査内容

(1) 基本的事項

学年、年齢、性、現在の運動部の所属の有無について質問した。

(2) 社会的一体感

前述した社会的一体感の定義、Ryan et al., (1994) の信頼感、岡沢他 (1996) の受容感、杉山・坂本 (2006) の被受容感尺度などを参考にして社会的一体感を構成する質問項目を選び、それらを用いた予備調査を実施した上で、最終的には「信頼、理解、受容」のそれぞれに3項目を配置した計9項目を選定した(表2参照)。調査時の教示は、「あなたは、周りの人からどのように思われていると感じていますか」であり、周りの人とは、あなたの身近にいる大切な人のことであった。各項目への回答は、「ほとんどあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」までのリッカート法で行った。

表2 社会的一体感の質問項目

1. 私は何かをするときに頼りにされている
2. 周りの人は私のことをわかってくれている
3. 私は周りの人から家族のように接してもらっている
4. 周りの人は私のことを信頼してくれている
5. 周りの人は私のことをよく知ってくれている
6. 私は周りの人とつながっているようにみられている
7. 私は周りの人から重要なことを任されている
8. 周りの人は私のことを理解してくれている
9. 周りの人は私を心から迎えてくれている

(3) 楽しさ、満足感

毎日の生活、運動やスポーツをすることの「楽しさ」と「満足感」について各2項目の計4項目について、「ほとんどあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」までの5段階評価で回答を求めた。

(4) 被受容感、被拒絶感

杉山・坂本(2006)が作成した被受容感・被拒絶感尺度を使用した。両尺度とも8項目であり、回答は「まったくあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」までの5段階で行った。

(5) 抑うつ

Beck抑うつ尺度(林, 1988)を参考にして、以下の7項目を選定した。各項目への回答は、「ほとんどあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」までの5段階評価であった。

1. 気持ちが落ち込んでいる
2. 自分自身に嫌気がさしている

3. 悲しい気持ちである

4. 憂鬱な気分である

5. 将来には希望が持てない

6. みじめな気持ちでいる

7. 不安である

(6) 対人的疎外感

杉浦(2000)が作成した対人的疎外感尺度を使用した。計21項目であり、各項目への回答は、「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5段階評価であった。

(7) 動機づけ

動機づけの定義、桜井・高野(1985)の内発的-外発的動機づけ尺度、体育における学習意欲に関連する検査(西田, 1989; 西田, 2004; Nishida, 2007)などを参考にして計8項目を選定した。それらの内容は、積極性・自発性、学習ストラテジー、達成、知的好奇心、自律性・自律的動機づけ、困難の克服・努力、挑戦、持続性であった。これらの8項目に対して、勉強する時、運動やスポーツをする時の2場面でそれぞれ質問した。前者を動機づけ(勉強)、後者を動機づけ(スポーツ)と命名した。各項目への回答は、「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5段階評価で行われた。

調査方法

各学校に調査用紙を送付し、学級単位での調査の実施を依頼して、その後に調査用紙を回収した。調査の際には、学校の成績とは一切関係ないこと、無記名の調査であり個人が特定されないこと、質問紙への回答は任意であること、途中で辞退することも可能であることを質問紙のフェイスシートに明記するとともに、調査の前に担当者から口頭で伝えて頂いた。また、対象者の調査協力への同意については、質問紙に回答する前に該当する欄にチェックを入れることによって得ることとした。

なお、本研究は、名古屋大学内の「ヒトを対象とする研究審査委員会(倫理委員会)」の承認を得て実施された(承認番号:1605)。

結果

社会的一体感尺度の構成

予備調査を経て選定された社会的一体感尺度の9項目に対して、分析対象者全員(N=912)を用いて因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施した。

その結果、固有値（寄与率）は、第1因子から順に、5.74（68.3%）、0.83（9.3%）、0.49（5.5%）、0.45（5.0%）となり、第1因子と第2因子の間で大きなブレイクがみられた。また、社会的一体感の項目は3つの内容（信頼、理解、受容）で構成されているため、3因子指定で因子分析を試みたが、想定した3因子に項目が明確にわかれなかった。このような結果は、運動部所属者（N=486）や無所属者（N=415）を対象とした因子分析においても同様であった。従って、社会的一体感尺度は、9項目の1因子構造であることが明確となった。

社会的一体感尺度の信頼性

上述の手順によって作成された社会的一体感尺度の信頼性を、折半法と再検査法で検討した。その結果、Cronbachのα係数は.93と高い値を示し高い内の一貫性が認められた。また、再検査法（4週間間隔）の結果は、 $r=.75$ と比較的安定した値を示した。

社会的一体感尺度の得点

社会的一体感尺度得点の平均値と標準偏差値を算出し、男女別、運動部所属別の比較をt検定を用いて行った。それらの結果は、表3および図2に示す通りである。

社会的一体感の平均値は、女子の方が男子よりも高く有意であった（ $t=-3.39, p<.01$ ）。また、運動部所属者の方が無所属者よりも高く有意であった（ $t=3.78, p<.01$ ）。

表3 社会的一体感の男女差および運動部所属の差

対象者	M (SD)	t 値	多重比較
男子	3.23(.76)	-3.39 **	女子>男子
女子	3.40(.73)		
運動部所属者	3.39(.69)	3.78 **	所属者>無所属者
運動部無所属者	3.20(.81)		

**p<.01

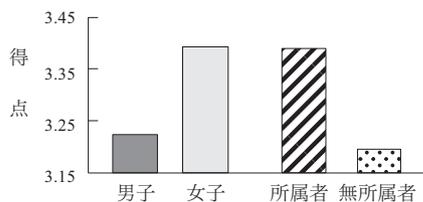


図2 対象者別にみた社会的一体感の平均値

社会的一体感と関連する心理的変数との関連性

社会的一体感尺度の基準関連妥当性(併存的妥当性)

を検討するため、社会的一体感と関連する心理的変数として、楽しさ、満足感、被受容感、被拒絶感、抑うつ、対人的疎外感、動機づけ(勉強)、動機づけ(スポーツ)を取りあげ、それらの変数との関連性を検討した。対象者別にみた各変数間の相関係数は、表4に示されている。その結果、いずれの対象者においても、社会的一体感と楽しさ、満足感、被受容感、動機づけ(勉強)、動機づけ(スポーツ)との間に有意な正の相関関係が認められた。特に、被受容感においては.675から.765の比較的高い相関係数が得られた。一方、社会的一体感と被拒絶感、抑うつ、対人的疎外感との間には、有意な負の相関関係が認められた。

表4 対象者別にみた社会的一体感と各変数との相関係数

	動機づけ (勉強)	動機づけ (スポーツ)	楽しさ	満足感
男子	.304	.433	.447	.446
女子	.322	.341	.357	.370
運動部所属者	.284	.384	.378	.391
運動部無所属者	.303	.305	.364	.354
全対象者	.303	.360	.388	.389
	被受容感	被拒絶感	抑うつ	対人的 疎外感
男子	.765	-.409	-.325	-.511
女子	.675	-.437	-.389	-.591
運動部所属者	.743	-.343	-.268	-.463
運動部無所属者	.718	-.499	-.369	-.609
全対象者	.731	-.424	-.333	-.546

相関係数は、すべて1%水準で有意

考 察

社会的一体感尺度の作成

本研究では、動機づけの環境要因(対人関係の認知)に着目し、社会的一体感の測定尺度を作成するとともに、その尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とした。予備調査を経て選出された9項目からなる社会的一体感尺度に因子分析を行った結果、固有値1.0以上の因子数が1であり、また第2因子以降の固有値の減衰状況から、社会的一体感は1因子構造であると判断された。その内容は、信頼、理解、受容の3つであり、自分の周りにいる重要な人から、「信頼され」「理解され」「暖かく受け入れられている」という感覚を示している。以上のことから、社会的一体感尺度は、1因子9項目で構成されることが明らかとなった。

社会的一体感尺度を用いて男女差ならびに運動部所

属差を検討した結果、社会的一体感は女子の方が男子よりも高かった。女子の親和欲求の高いことがこれまでの研究で指摘されており（宮本・加藤，1975），そのことが社会的一体感に影響したのかもしれない。このような性差は、女子の受容感が男子よりも高かったことを報告した岡沢他（1996）の研究結果とも一致していた。また、運動部所属者は、無所属者よりも社会的一体感が高かった。この結果は、運動部での経験が社会的一体感を形成する貴重な場である可能性を示唆するものである。今後は運動部において、どのような活動内容や経験が社会的一体感に影響しているのかについて詳細に検討していくことが必要である。

社会的一体感尺度の信頼性および妥当性

社会的一体感尺度の α 係数は.93と高い値を示し、再検査法の結果は $r=.75$ と比較的安定した値を示した。これらの結果から、社会的一体感尺度の信頼性（内的一貫性、安定性）は十分に高いと判断できる。

次に、社会的一体感尺度の妥当性についてであるが、予備調査を経て選定された9項目は、これまでの関連研究のレビューや動機づけ研究者の意見を踏まえて選定されたものであった。この点から判断して、内容的妥当性は十分に高いと言える。また、基準関連妥当性（併存的妥当性）として、自分の周りにいる重要な人から、「信頼され」「理解され」「暖かく受け入れられている」という社会的一体感の概念と関係の深い心理的変数との関連性を検討した。その結果、楽しさ、満足感、被受容感、動機づけ（勉強）、動機づけ（スポーツ）との間に正の相関関係がみられ、被拒絶感、抑うつ、対人的疎外感との間には、負の相関関係が認められた。これらの結果は、社会的一体感が高ければ、毎日の生活や運動やスポーツをすることの楽しさや満足感が高くなること、人から受容されているという感覚が高くなること、勉強やスポーツにおける動機づけが高くなることを示唆している。また、社会的一体感が高ければ、人から拒絶されているという感覚、抑うつ感、対人関係の中で疎外されているといった感覚が低くなることも合わせて示唆された。これらの結果は、社会的一体感の基準関連妥当性を支持するものである。以上のことから、本研究で作成された社会的一体感尺度の妥当性は、十分に検証されたと考えられる。

本研究において、社会的一体感尺度が作成された。これを契機として、この種の動機づけ研究が今後さらに推進されていくことが期待される。図3には、現時点で考えられる今後の研究課題を示した。例えば、他

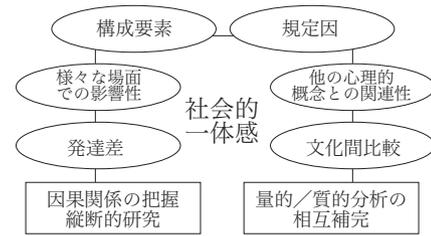


図3 今後の研究課題

の心理的概念との関連性をさらに検討し、社会的一体感の内容や構成要素を明確にすることがあげられる。また、社会的一体感がどのような変数や要因によって規定されているのかを明らかにすることも必要である。社会的一体感が日本人特有のものなのか、どの発達段階で獲得されるものなのかについても明らかではない。発達の視点を取り入れた文化間比較研究が必要である。さらに、これらの研究を遂行するにあたり、特に因果関係の把握においては、横断的な検討だけではなく縦断的な取り組みが必要であり、量的および質的分析を併用した相互補完的アプローチも有効である。

付 記

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究(C) (No. 22300207, 研究代表者：西田 保) の助成を受けて行われた研究の一部である。

文 献

- Atkinson, J. W., & Feather, N. T. (1966). *A theory of achievement motivation*. New York: Wiley.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**(2), 191-215.
- Deci, E. L. (1975). *Intrinsic motivation*, New York and London: Plenum Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, **41**(10), 1040-1048.
- 林 潔 (1988). Beck の認知療法を基とした学生の抑うつについての処置. 学生相談研究, **9**(2), 97-107.
- Hull, C. L. (1952). *A behavior system*. New Haven, CT: Yale University Press.
- 伊藤崇達 (2007). やる気を育む心理学. 北樹出版.
- McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A., & Lowell, E. L. (1953). *The achievement motive*. East Norwalk, CT: Appleton-Century-Crofts.

- 宮本美沙子・加藤千佐子 (1975). 達成動機と親和動機との関係について. 日本女子大学紀要, **22**, 23-28.
- Murray, H. A. (1938). *Exploration in Personality*. New York: Oxford University Press.
- 中谷素之 (2007). 学ぶ意欲を育てる人間関係づくり—動機づけの教育心理学. 金子書房.
- Nicholls, J. G. (1984). Achievement motivation: Conception of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, **91(3)**, 328-346.
- 西田 保 (1989). 体育における学習意欲検査 (AMPET) の標準化に関する研究—達成動機づけ論的アプローチ—. 体育学研究, **34(1)**, 45-62.
- 西田 保 (2004). 期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究. 杏林書院.
- Nishida, T. (2007). Diagnosis of Learning Motivation in Physical Education Test (DLMPET) and its applicability to educational practice, *International Journal of Sport and Health Science*, **5**, 83-97.
- 岡田 涼 (2013). 友だちとのかかわりを促すモチベーション—自律的動機づけからみた友人関係—. 北大路書房.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996). 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, **16(2)**, 145-155.
- Ryan, R. M., Stiller, J. D., & Lynch, J. H. (1994). Representations of relationships to teachers, parents, and friends as predictors of academic motivation and self-esteem. *Journal of Early Adolescence*, **14(2)**, 226-249.
- Ryan, R. M. and Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55(1)**, 68-78
- 桜井茂男・高野清純 (1985). 内発的—外発的動機づけ尺度の開発. 筑波大学心理学研究, **7**, 43-54.
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達的变化—. 教育心理学研究, **48(3)**, 352-360.
- 杉山 崇・坂本真士 (2006). 抑うつと対人関係要因の研究：被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討. 健康心理学研究, **19(2)**, 1-10.
- Weiner, B. (1972). *Achievement motivation and attribution theory*, NJ: General Learning Press.

(最終版令和元年9月14日受理)

Development of a Sense of Social Togetherness Scale

Tamotsu NISHIDA

Human motivation is connected with the way in which people perceive how they are evaluated by others who are close and important to them. When they feel there are people around them who trust, understand and accept them, their motivation will be strong. These feelings, “a sense of social togetherness”, have a positive influence on human motivation in a range of situations. Individuals with a high level of such a sense will try hard at school, in sports, at home, work, and in other settings. They also will be better able to maintain a healthy mental outlook and not fall into depression. This study aimed to develop a scale to measure this sense of social togetherness and examined its reliability and validity.

The subjects were 912 high school students (502 boys and 410 girls) from 5 high schools in three prefectures in Japan. Their ages ranged from 15 to 18 years ($M=16.3$ yrs.). They were 486 students who take part in extracurricular sports club activities and 415 students with no such activity. A 9-item questionnaire test to measure the sense of social togetherness including trust, understanding and acceptance was prepared after a preliminary study. The subjects indicated their degree of agreement with each item statement by responding on a 5-point Likert-type rating scale anchored from “strongly disagree” to “strongly agree”.

A principal factor method with promax rotation was applied to the items of sense of social togetherness. It indicated that the sense of social togetherness scale composed of 9 items with a one factor model. Cronbach's alpha ($\alpha=.93$) and reliability coefficients with 4 weeks intervals ($r=.75$) were sufficiently high. The sense of social togetherness mean score for girls was significantly higher than those for boys ($t=-3.39, p<.01$). The score for students who take part in extracurricular sports club activities was significantly higher than those for students with no such activity ($t=3.78, p<.01$). Moderate to slightly high positive correlations were obtained between the sense of social togetherness and feelings of enjoyment, satisfaction in everyday life and sports, sense of acceptance of everyday life, and motivation in studies and sports activities. In the same vein, moderate negative correlations were found between the sense of social togetherness and a feeling of rejection, depression and alienation. Judging from these results, it was concluded that the reliability and validity of the sense of social togetherness scale were sufficiently high and the scale was effectively useful in the further motivation research.

Keywords: Perceived interpersonal relations, sense of social togetherness, scale development, reliability, validity